

《解題》

明星大学社会学科における研究成果刊行物(1)

—『明星大学社会学科研究報告』第1集～第12集—

高島 秀樹

目次

はじめに

1. 『明星大学社会学科研究報告』の創刊
2. 『明星大学社会学科研究報告』の継続刊行
3. 『明星大学社会学科研究報告』の休刊

おわりに

はじめに

明星大学は1964(昭和39)年4月に、1923(大正12)年に創設された明星実務学校に淵源を持つ学校法人明星学苑の創立40周年を期として創設された。創設初年度である1964(昭和39)年度には理工学部1学部5学科(物理学科、化学科、機械工学科、電気工学科、土木工学科)で出発したが、翌1965(昭和40)年度には人文学部3学科(英語英文学科、社会学科、心理・教育学科)を創設、1966(昭和41)年度には人文学部に経済学科を増設し、総合大学としての基礎を整えた。さらに1967(昭和42)年度には大学教育の機会拡大をめざして通信教育部(人文学部心理・教育学科)を創設した。

本紀要『明星大学社会学研究紀要』の発行主体である明星大学人文学部人間社会学科は、途中に名称の変更・組織の改編はあるものの1965(昭和40)年に創設された人文学部社会学科を出発点とする。人間社会学科は現在、本紀要『明星大学社会学研究紀要』と『明星大学社会学研究報告』を刊行しているが、その出発点は社会

学科創設間もない時期、社会学科が完成年度に達し、第1回の卒業生を送り出そうという1969(昭和44)年3月24日に創刊された『明星大学社会学科研究報告』にある。

2014(平成26)年には明星大学創立50周年を迎え、多くの記念事業が実施されており、社会学科創設から50年ちかく、学科刊行誌の創刊から40余年が経過しようとする今日の時点において、これらの学科刊行誌の創刊とその後の歩みについて記録に残すことは一定の意味を持つものと考え、ここに「資料」として掲載させていただくこととした。

1. 『明星大学社会学科研究報告』の創刊

社会学科が完成年度に達し、第1回の卒業生を送り出そうとする1968(昭和43)年12月7日に社会学科主催により第1回社会学科研究発表会が開催され、その講演内容を収録して1969(昭和44)年3月24日(第1回卒業式当日)に『明星大学社会学科研究報告』第1集が創刊された。この間の事情や、そこにどのような意図がこめられていたのかについては、第1集の巻頭に掲

げられた学科主任（当時）である銅直勇の「はじめに」に明示されている。その「はじめに」の全文は次のとおりである。

はじめに

本学主任教授 銅直 勇

わが明星大学は昭和三十九年四月、先づ理工学部としてこの日野市明星台上に創設され、翌四十年四月さらに人文学部が増設された。社会学科はこの人文学部の一学科として、英語英文学科、心理教育学科、次いで開設された経済学科とならんで、明星大学の一環を成しているのである。明星大学は他の多くの大学に見るような巨大な数量値をもってはいないが、新設の大学として特色ある教育的成果をあげようと努力しているのである。

われわれの社会学科は、人文学部の開設以来、四年を閲し、近く才一回の卒業生を送り出そうとしている。教授陣においても、社会学科の専任者七名、一同力をあわせて、大学の目的達成に専念している。学生の数も学年を追うて増加し、昨年度才四年次を完成し、研究の体制も漸く整ったので、四十三年十二月七日、才一回の研究発表会を開催した。こゝに当日の講演筆記を印行して、諸君に領つことが出来ることを、一同の欣びとするのである。われわれはこの機会に、四年前われわれ社会学科が、如何なる主旨をもって発足したかを想起することを甚だ意義あること、考える。

さて、昭和四十年明星大学要覧を見ると、社会学科の目的として次のように述べてある。

「我が国における社会学の研究は新しいものではないが、然し戦後急速に発展を遂げた学問の一つである。それは近時における我が国の社会情勢の急速な発展と変化に即応している。現代社会はその発展に伴っ

て、いろいろ重要な問題を発生した。而して社会学はそれらの諸問題を一方面からだけでなく、他の諸現象との係わりにおいて、また歴史的発展の連りにおいて、適切な解明をなすことをその任務とし、今日社会から多大の期待をかけられている。

抑々社会は人間のあらゆる活動の舞台であって、人間は不断にそれからいろいろの影響や規制をうけている。人間の形成は、実にこの社会を通ずることによってのみ達成せられる。社会学は、かくも重大な社会というものを学問的に研究し、その根本原理を明らかにし、その諸問題を討究することを目的としている。

社会学科はかような社会の根本的研究をなすとともに、更に学生が卒業後、社会有用の材として社会に迎えられ、応用的実際の方面にも、すぐれた活動をなし得るよう、特色ある学科課程を編成することに配意している。

即ち、われわれの社会学科は、根本的には社会の基礎的理論の研究解明に努力するとともに、社会調査や社会統計の学習によって、社会の実態を実証的に討究する方法を修習し、更に現代社会の重要問題である都市や産業や、大衆社会や社会福祉等の現実的問題を研究することに特別に留意している。

要するに我々の念願するところは、かような確固たる学問的知見を基礎とする、道義心の強い人間、世界に信頼される日本人という本学の精神の下に、特色ある社会学科を成就し、以って学あり、才能あり、人格の優れた明星大学独特の人物を養成して社会に貢献したいと思っているのである。」
思うにかような目的の達成は一日にして成ることは出来ない。それは教授者と学生と卒

業者とが、同一の目的に向って精進協力し、その功を積むことによるのみ期し得られるであろう。今諸君の学窓生活の一記念として、研究発表会の講演が印行され、卒業の良きお土産として領たれることになった。これに関してまずオ一に御礼を申し上げなければならないのは、岡田謙博士が特にわれわれのために、御多端にも拘らず貴重の時をさかれ社会学研究の根本方針について貴重な講演を与えられ、当日の会衆一同深い感銘をうけたことである。又本集に収められている伊藤教授の「未来社会について」という極めて興味ある、また有意味な講演、次に福永助教授及び中田講師の指導協力によって、学生諸君による日野市の社会調査のオ一回の調査報告も、われわれの学習や研究の一成果を示したものであり、それぞれに有益な研究報告として、諸君を裨益すること大であろうと思う。

われわれの社会科学は今後更に新たな構想をもって、別個の研究発表の機関をもちたいと考えているが、とりあえず本集のような形で、われわれの研究課程の結集を印行することになった。

ひとえに今後における我が学科の充実発展を祈念してやまない。

(昭和四十四年二月二十六日記)¹⁾

このような状況認識、意図の下に創刊された『明星大学社会科学研究報告』第1集は、A5版、本文62頁、孔版印刷によるもので、この基本的な形態は第11集もしくは第12集(後述するように第12集は版形は従来同様のまま、活版印刷となった)まで踏襲された。

『明星大学社会科学研究報告』の第1の特色は《資料》として掲載した目次から理解されるように、教員と学生が共通の研究成果・学習成

果発表の場を持つということである。教員の研究成果発表の場としての紀要の発行は多くの大学・学部・学科に見られるところであって、明星大学においても大学研究紀要(各学部別)のほかにも学部・学科、大学院研究科・専攻などが発行主体となる研究紀要は数多く発行されている。他方、学生の教育・学習成果の発表の場を持つことも発表会や印刷物という様々な形式ではあるが、他の部局においても数多く見られる。しかし、教員と学生共通の成果発表のための刊行物を発行するということは独自性を持つ試みであり、当時の学科教員が教員と学生の位置づけをどのように考えていたか、教員と学生の研究成果・学習成果についてどのように考えていたかを示唆するものと考えられる。教員の研究活動と学生の学習・研究活動を基本的に異なったものと区別することなく、教員の研究成果が学生への教育指導の基礎となり、それによって学生の学習・研究成果が上がるというきわめて関連の深いものとして認識し、取り扱おうとする認識に基づいてこのような印刷物の刊行いたったと解題執筆者は推測する。ちなみに、第1集刊行当時の学科所属教員は次のとおり(()内は当時の職)である。

銅直 勇 (主任教授)
三好豊太郎 (教授)
桜井庄太郎 (教授)
伊藤 章 (教授)
福永 安祥 (助教授)
山下淳志郎 (助教授)
中田 重厚 (専任講師)

第2の特色は、前掲の銅直勇の「はじめに」にも記されているとおり学科の研究活動の一環として社会科学研究発表会を開催し、その内容をこの『明星大学社会科学研究報告』に掲載したことである。第1回の研究発表会は1968(昭

和43)年12月7日に開催されたが、解題執筆者の記憶によれば土曜日の午後に社会学科の全学年の学生が出席して開催され、第1集の目次にあるものと同じく外部講師の記念講演、教員と学生の研究発表が行われた。学生の研究発表については1年目(第1集所載)には第1回生が前年の3年時に実施した社会調査実習の成果が4年次生から発表されたが、2年目(第2集所載)からは研究発表会の開催時期が1月末に繰り下げられ、4年次生の卒業研究の成果が発表されるようになった。この変更の詳しい事情については、解題執筆者は残念ながら詳細に記憶していない。

第3の特色は、上にも触れたが第1回を記念して学外の著名な社会学研究者を招き、記念講演を実施し、それを収録していることである。岡田謙は当時東京教育大学教授であり、本学科教授である伊藤章が共同研究者の一人として参加した1955(昭和30)年にアジア財団の委嘱によって岡山県高松町新池を対象として実施された「農業機械化による社会的経済的影響」についての調査研究²⁾の代表者であったことから、伊藤章と岡田謙の間に親交があり、この縁によって実現したと推測される。岡田謙の講演はE. デュルケームの自殺論と日本の同族研究を素材として社会学・社会学研究の基本的な特質、社会学研究者の努力について明らかにしようとする内容を持つものであった。この原稿については、講演録を書き起こし、伊藤章の校閲を経て掲載されたものであり、掲載論文の末尾に「(文責 伊藤 章)」と記載されている。このような企画が考えられたことは、当時の学科教員が学生に対して広く学外からも碩学を招き、その教えを受けさせたいとの願いを持っていたこと、学生の学習機会の充実を願っていたことによって実現したものと解題執筆者は考える。

2. 『明星大学社会学科研究報告』の継続刊行

以上に記したような意図・特色を持って発刊された『明星大学社会学科研究報告』であるが、何よりも高く評価すべきことはこの後年1回の刊行を維持し、第12集まで刊行時期も守って確実に継続刊行されていることである。

掲載された論文については、教員の研究成果と学生の研究成果としての卒業研究を主とするという基本的な内容は変わらないものの、時期とともにそれら以外の研究成果なども掲載するという若干の変化は見られる。《資料》として掲載した目次にも見られるように、早くも第2集には《紹介》として翻訳が掲載され、第4集にも《翻訳》が掲載されている。第4集には《調査報告》として「保谷市民の自治意識について」が掲載されているが、これは福永安祥・中田重厚・佐々木たみ子の3名の共同執筆によるもので、「東京都の多摩地区は、急速な都市化が進んでいるが、そこに住む住民の自治意識の特質について昭和四十六年三月六日より三日間、朝日新聞首都部と協同して、東京都保谷市において調査を実施した。」³⁾ものであり、その主な内容は I. 市政について、II. 選挙について、フェース・シートから構成されている。学生が調査員として参加したものと考えられるが、この時期にこのような学科単位の社会調査活動が実施されていることは記憶されて良いことであろう。また、第6集には山下淳志郎・中田重厚・堤史朗による「柳田民俗学の基礎視点」⁴⁾と題する共同研究の成果が掲載されているが、これは後に同メンバーによる科学研究費による共同研究につながるものである。これらの例に見られるように、『明星大学社会学科研究報告』の内容を見ることによって、その時々社会学科の研究活動の動向を知ることができ

る。

12年間という年月が経過する中では、残念ながら不幸な出来事も生じてくる。1969(昭和44)年9月には、前年に記念講演をお願いした岡田謙が逝去され、第2集に伊藤章による「〈記事〉 岡田謙先生を偲ぶ」が掲載されている。さらに1970(昭和45)年8月には桜井庄太郎が現職教授在職のまま逝去され、第3集には銅直勇による「桜井庄太郎教授の追憶」(本文冒頭の題目:目次記載の題目と本文冒頭の題目に相違がある)が掲載されている。第12集は、1979(昭和54)年7月に逝去された銅直勇に捧げられた「銅直勇先生追悼記念論文集」として発行された。《資料》として掲載した目次に見られるとおり、この号には三好豊太郎と馬場明男による銅直勇に対する追悼文、年譜、著作目録のほか、当時の学科教員、大学院修了生・大学院生による論文が掲載され、卒業研究の成果である研究報告も含めて全205頁の大冊となり、印刷も活版印刷となっている。

12集を数える各集には、記事として「卒業論文題目」、「編集後記」(「校正雑感」「社会科学近況」など題目が異なる集がある)、「社会科学専任者名」が掲載されており、これらを年を追って見ることによって、社会科学の動向を把握することができる。例として、第1集刊行時の1968(昭和43)年度から第12集刊行時の1979(昭和54)年度にいたる12年間における専任教職員の動向については、次のようにとらえることができる。

銅直 勇 1968(昭和43)年度=主任教授
→1977(昭和52)年度=教授→1977(昭和52)年度末=退任
三好豊太郎 1968(昭和43)年度=教授→

1977(昭和52)年度=主任教授→
桜井庄太郎 1968(昭和43)年度=教授→
1970(昭和45)年度=退任(逝去)
伊藤 章 1968(昭和43)年度=教授→
福永 安祥 1968(昭和43)年度=助教授→
1969(昭和44)年度=教授→
山下淳志郎 1968(昭和43)年度=助教授→
1975(昭和50)年度=教授→
中田 重厚 1968(昭和43)年度=専任講師
→1974(昭和49)年度=助教授→
高島 秀樹 1969(昭和44)年度=助手補→
1972(昭和47)年度=助手→
佐々木たみ子1970(昭和45)年度=助手補→
1972(昭和47)年度末=退任
百木 英明 1971(昭和46)年度=助手補→
1976(昭和51)年度=助手→
堤 史朗 1971(昭和46)年度=嘱託助手
→1975(昭和50)年度=専任講師→
波多 尚 1972(昭和47)年度=教授→
山川 裕子 1973(昭和48)年度=助手補→
1977(昭和52)年度末=転出
安西 文夫 1975(昭和50)年度=教授→
馬場 明男 1976(昭和51)年度=教授→
石渡(三浦)照子 1978(昭和53)年度=助手補→

3. 『明星大学社会科学研究報告』の休刊

このように教員と学生の研究成果を同一誌上に掲載するという特徴を守って、1年1回刊行を続けてきた『明星大学社会科学研究報告』であるが、第12集(1980(昭和55)年3月刊行、「銅直勇先生追悼記念論文集」)をもって刊行が途絶える。

これはこの当時の一部の教員から、教員とそれに準ずる者の研究成果を発表することに特化した「紀要」として刊行しようという意見が出たことに起因すると解題執筆者は記憶している。

これを受けて翌年、1981（昭和46）年3月に『明星大学社会学研究紀要』第1号が発刊された。ちなみに第1号の内容は次に掲げる目次のとおりであった。

〈論文〉

- 機能主義批判の現段階……………安西 文夫
- フランクフルト研究所の人々
- カール・ウイットフォォーゲル—
- ……………馬場 明男
- 戦後の産業変動と地域性……………山下淳志郎
- 中田 重厚
- 堤 史朗

〈記事〉

- 研究室記事
- 卒業論文題目⁵⁾

記事（研究室記事・卒業論文題目）の掲載は存続しているものの、教員の研究成果のみを発表する刊行物となったことはこの目次から明らかである。

学生の研究成果発表のための刊行物を発行しようという伝統については、1992（平成4）年3月に蘇り、『明星大学社会学研究報告』と改題されたが、前身である『明星大学社会学科研究報告』を引き継ぐものとして第13集として刊行された。この誌名は既に大学院人文学研究科社会学専攻（修士課程・博士課程：当時）が開設されており、学部の学科と大学院の専攻両者を包含する刊行物として「社会学科」は適切ではないと考えられて一部変更になったものであり、基本的な理念、刊行物の性格は変化していない。ちなみに第13集の内容は次に掲げる目次のとおりであった。

- 発刊のことは……………鈴木 幸壽

〈ゼミナール活動報告〉

- 日本型資本主義の論理とその現実的展開
- ……………現代日本社会論ゼミナール
- ごみから考える
- 山下ゼミ合宿報告—
- ……………社会学研究Ⅰ・Ⅱ（山下ゼミ）
- 農のある町づくり
- 羽村市を研究事例として—
- ……………1991年度社会調査実習（中田ゼミ）
- 外国人労働者問題を考える
- ……………社会学研究Ⅰ（渡戸ゼミ）
- 森田 浩介 清水 学 手塚 貴博
- 森永 啓之 長谷川 満

〈卒業研究報告〉

- いま、なぜ夫婦別姓なのか……………戸出 雅也
- 共働き家庭と子どもの保育……………吉田 治子
- 祖父母と孫関係に関する一考察
- 大学生調査を中心に—……………倉野加奈子
- 現代青年文化……………松本 芳樹
- 摂食障害を惹き起こす現代女性の生活意識
- ……………関 真理子
- 女性の社会的地位と男女雇用機会均等法
- ……………今 圭子
- 多摩ニュータウンの居住環境……………小林 恭子
- ファジィ的世界の思想……………萩原 良一
- 〈記事〉
- 修士論文題目……………
- 卒業論文題目……………⁶⁾

上記のように、学科主任（当時）鈴木幸壽による「発刊のことは」のほか、ゼミナール活動報告＝4（ゼミナール報告＝3、社会調査実習報告＝1）、卒業研究報告＝8、記事＝2である。この内容から、復刊された『明星大学社会学研究報告』は学生の研究成果の発表に特化したものであることは明らかである。

おわりに

明星大学人文学部社会科学において、学科創設初期に刊行された『明星大学社会科学研究報告』について、その目次を示し、そこから読み取れることを明らかにしてきた。そこでは何よりも、当時の学科教員が教員と学生、教員の研究・研究成果と学生の学習・研究、学習成果・研究成果についてどのように考えていたかを推測することができる点が最も重要なことであると解題執筆者は考えている。1969（昭和44）年という時点において、学科教員がこのような考え方を持っていたことは再認識すべきことである。50年近い年月が経過した今日においても大

学、大学における研究と教育、大学における教員と学生の位置づけなどの基本的なあり方を考えるうえで一つの見識を示すものとして示唆に富むものであると解題執筆者は評価している。

また、この時期の教員と学生の研究動向については掲載論文という限られた範囲からではあるが、把握できたものとする。このあとに刊行された『明星大学社会学研究紀要』と『明星大学社会学研究報告』の両者について、その掲載内容を明らかにし、そこから読み取れることを考えていくことが解題執筆者にとって次の課題となることを記して「おわりに」としたい。

(2014年8月・稿)

【注】

- 1) 銅直勇「はじめに」(明星大学人文学部社会科学編『明星大学社会科学研究報告』第一集、1969年刊、所収) 1～3頁
- 2) この調査研究の成果は、岡田謙・神谷慶治編『日本農業機械化の分析 岡山県高松町新池における一実験』1960年、創文社刊、として刊行されている。
- 3) 福永安祥・中田重厚・佐々木たみ子「保谷市民の自治意識について」(明星大学人文学部社会科学編『明星大学社会科学研究報告』第四集、1972年刊、所収) 61～82頁
- 4) 「柳田民俗学の基礎視点」(堤史朗「柳田民俗学の形成－柳田国男にとっての『旅』の意味－」・中田重厚「柳田民俗学に欠けるもの」・山下淳志郎「仮説としての『常民』思想」)(明星大学人文学部社会科学編『明星大学社会科学研究報告』第6集、1974年刊、所収) 12～27頁
- 5) 明星大学人文学部社会科学『明星大学社会学

研究紀要』第1号、1981年刊、目次(頁表示なし)

- 6) 明星大学大学院人文学研究科社会学専攻・明星大学人文学部社会科学『明星大学社会学研究報告』第13集、1992年刊、目次(頁表示なし)

【参考文献】

明星大学人文学部社会科学編『明星大学社会科学研究報告』第一集、1969年～第12集、1981年、明星大学人文学部社会科学刊(付記：第一集から第四集は数字が漢字表記、第5集以降は洋数字表記になっている。)

【付記】

本稿は歴史的研究であると位置づけ、敬称を全て省略させていただいた。ご了解いただきたい。

(たかしま ひでき、本学科教授)